



# 里山の原風景を現代に残す 大山千枚田

棚田とは山の斜面や山間部の傾斜地に階段状につくられた水田です。山がちな日本ではかつて全国各地で見られましたが、現在では耕作放棄が進み、最盛期の半分ほどの数に減っているといわれています。今回は千葉県鴨川市にある大山千枚田にスポットをあて、棚田保全活動に関わる大山千枚田保存会にお話を伺いました。

特定非営利活動法人  
**大山千枚田保存会**  
活動名  
南房総地域における草地環境の生態系の把握とその多面的機能の普及啓発活動  
千葉県鴨川市  
<http://www.senmaida.com/index.php>



理事長  
**石田 三示さん**



事務局長  
**浅田 大輔さん**

大山千枚田保存会は、千葉県鴨川市にある大山千枚田の保全を目的に、さまざまな事業を展開している団体。棚田を貸し出す「棚田オーナー制度」を軸に、「自然観察会」や「体験活動」などの事業を実施。大山千枚田の魅力を伝えるとともに、地域全体の活性化に力を入れている。



自然観察会では、子どもから大人まで楽しめるプログラムを企画している。棚田にいる生き物も大切な財産。生態系を活用してさまざまな事業が行われる

里山の美しい原風景として、人々から親しまれている棚田ですが、一枚一枚の面積が小さく、傾斜地にあることから、労力のかかる条件不利地域とされています。1970年代ごろからの米の生産量を抑制する減反政策や、山間地域の過疎、高齢化などにより、棚田はまっさきに放棄されていきました。大山千枚田も同じです。大山千枚田には全部で375枚もの水田がありますが、90年代には農家がわずか8軒にまで減少。高齢化も進み、そのままにしておけばいずれ消えゆく運命でした。そんな大山千枚田を守ろうと立ち上

がったのが、大山千枚田保存会理事長の石田三示さんです。きっかけは、都会から鴨川に移住した人の言葉だと石田さんは話します。「ここで生まれ育った自分にとっては、棚田はごく当たり前にあるもので、むしろ面倒な土地だから放棄されても仕方がないとすら思っていました。ところが移住してきた人に、棚田の景観が非常に素晴らしいと言われ、初めて棚田がこの地域の財産であり、美しい景観や田んぼとしての機能、豊かな生態系は、保存していくべきものだ気づいたので」

97年、石田さんは大山千枚田保存会を発足。2000年には全国でも先駆けて、空いている区画を貸し出し、オーナーとして田植えから収穫までの米作りを実施してもらう「棚田オーナー制度」をスタートさせました。「棚田を守りたい」という保存会の思いと、「自分で米作りをしてみたい、もっと自然と触れ合いたい」という都会に住む人々のニーズがマッチし、オーナーは順調に増加。今では棚田のオーナーと地域住民との間で、積極的な交流も行われています。「耕作地の放棄や高齢者の増加など、地域の課題を逆手にとり、今や棚田を大切な財産として活用



春

機械が入れない棚田の田植えは全て手作業で行われる



夏

オーナーは何度も棚田に足を運び、こまめに草刈りをする



秋

棚田一面が黄金色に染まれば、慌ただしく稲刈りが始まる



冬

松明とLEDで美しくライトアップされる棚田は冬の風物詩

## 棚田の四季

「そのほかに、同団体では、棚田に生息する動植物を間近に見られる「自然観察会」や、米作り、わら細工作りなどの「体験活動」を企画しています。授業の一環として学校単位での参加も多く、子どもを中心に年間約5000人が棚田を訪れています。事務局長の浅田大輔さんは「人が手を加えているからこそ、美しい景観や生態系が保たれているということを子どもたちに伝えたい。棚田での体験をひとつのきっかけとして、自分たちの暮らす地域の自然や環境問題にも興味をもってほしい」と話します。

四季折々の棚田の美しさや米作りの楽しさに魅了され、都会から棚田地域に移住する人も増えています。石田さんは「米作りを通して何度も棚田に足を運んでもらい、地域住民との交流を深めることで、地域の魅力を知ってほしい。地域の魅力とはそこに住む人々や自然環境など、元来からこの土地にあるもの。その地域資源をうまく活用して、棚田の魅力を伝える事業を企画していきたい」と展望を語ります。